



# 共同通信



2010年1月28日 161(371号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22  
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp  
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901  
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、  
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、  
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、  
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、  
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 61

## 『ホノルルマラソン』

ほぼゼロの状態から、わずか半月ほど、ぼっぼの子のお弁当がちょうど始まった頃からでしょうか・・・幼稚園に行っている時間に練習をして挑んだ人生初めてのフルマラソン。

一番長く練習した距離22～23kmを2回程。それと週一回の筋トレ。本当に走りきれるのか不安ばかりでした。それは忘年会の席で、ノリで企画され盛り上がり、しかも7歳からエントリーできるということで、家族皆でエントリーすることで始まったわけです。最初は、各自で自分のペースで走りきる事、と軽い気持ちで言ってましたが、やはりいろいろ調べてみたり、日が近付くにつれ、2年生の息子はお父さんとスタートから

一緒に走り、6年生の息子は朝5時でまだ真っ暗、不安な気持ちが無くなるまで私が一緒に走ることになりました。

いよいよ当日、もうお祭りです。花火の合図と共にスタート。一斉にワァーと言いながら走り始め、所々のイルミネーションが綺麗だったり、すれ違う人たちからも息子に「頑張れ！」とエールをかけてくれたり、日も上がり、明るくなってきた頃、息子は「ママ、もう一人で頑張れるから先に走って良いよ！！」その言葉に「本当にダメと思ったらリタイアしていいからね」と言いました。「大丈夫！ゴールするから！！行ってえ～！」と息子は、私が家族で一番練習

してきたのを知っているから、気を使ってくれたのです。それから「よし頑張るぞ」とファイトが出てきました。お友達3家族でエントリーしていたので、すれ違うロードで友達を見つけては「頑張ってる」と声援し、6年生の息子はお友達と3人仲良く歩いていてホッとし、ずっと心配だった2年生の息子と主人を探しながら走っていると、いました！息子に頑張れーと頭をさわり応援、でもその時息子は元気が無く暗い表情。やはりしんどくてつらい思いをして頑張っていると思ったら、涙が出てきてやるせない気持ちになりました。ゴールした後で聞いた話では、私の姿を見た息子は泣いてしまって、主人が気持ちを盛り上げるのに大変だったと聞かされました。私はゴールするまで何とか目標タイムで走りきろう、その後お泊り保育所まで娘を迎えに行かなくては、そればかり考えて走っていました。もちろん景色は最高です。

走りながら見る青いキラキラ輝いた海、青く広くすんだ空、素敵なお家に湖、どこも最高。沿道で応援して下さる現地の方たちや、ボランティアの方々に励まされ、足首が痛くなつてはエアーサロンパスをかけ、もう必死になってゴールしました。家族やお友達がゴールした時は、本当に良く頑張ったー感激の涙、涙でした

2 このマラソンによって喜びとか、苦

しみとか、達成感とか、あらゆる感情を突き抜けた今まで味わったことのない感覚がわぁーって押し寄せてきて、本当に素晴らしい経験をしたと思いました。子どもたちは、この経験をバネに強くたくましく成長してほしいと思います。こうして一つも目標に向かって家族でできる幸福、そんなお友達がいる幸福、サポートしてくれる友達がいる幸福、心から感謝しています。順子先生からも、応援の言葉と、幼稚園のバンダナを頂き、それをウエストポーチにくくりつけ、走りながら何度も汗をぬぐいました。苦しい時は、にぎりしめて、パワーと勇気をもって走りきれたと思いました。私一人では絶対無理。たくさんの方が何らかの形で応援して下さいからの結果だったと思います。本当にありがとうございます。いつかまた、ホノルルマラソン、走りたいと思います。

(浜谷 宏美)

大抵の人が心の奥底は持っているけれども少々言葉で言うのは照れくさいもの、優しさとか純粋さとか慈しむ心とした類のもの、そのようなものを導きだしているからではあるまいかと。

とするなら、こう言換えてもいざろうか、絵がそれらを表しているだけではなく、ひとはだれもその内側で何か良きものを沈潜させていて、絵はそれを覆う夾雑物をふいと取り除いてくれる一陣の微風でもあるのだと。

(「奇跡の画家」後藤正治、講談社)

・弟子たちは「・・・これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」という、雲の中からの声を聞いた時、「非常に恐れ、顔を地に伏せ」ます。弟子たちは、近づいてきたイエスに「起きなさい。恐れることはない」と声をかけられるのですが、イエスの他には誰も見えませんでした。(以上、マタイによる福音書17章5～8節)。雲の中から声で「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」と言われ、弟子たちはそのことで恐れ、地に伏せているとイエスが近付いてきて、手を彼らにおいて恐れることはない、というような展開になるのであれば、聞くべきはイエスであることはすんなり了解されることとなります。解りやすいのです。と言うか、マタイによる福音書は、なぜイエスに聞くのかを、解りやすくまとめたのです。聞くべきことを、言うべき人が語っているという意味で。雲の中からの声に“非常に恐れた”弟子た

ちが、“恐れることはない”とイエスに言われたとしても、恐れそのものはどこかに行ってしまう訳ではありませぬ。むしろ、“恐れ”ということで行われていることが、原動力になることを想定して、マタイによる福音書のイエスは弟子たちに語りかけます。

マルコによる福音書の、このことについての描写は、一つ一つのことのつながりが悪くなっています。解りにくいのです。「・・・すると、雲がわき起こって彼らをおおった。そして、その雲の中から声があった。『これはわたしの愛する子である。これに聞け』彼らは急いで見まわしたが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが自分たちと一緒におられた」(マルコによる福音書9章7、8節)。ここでは、起こっていることを説明するような言葉は、書かれていません。確かに、雲の中からの声が「これはわたしの愛する子である。これに聞け」と言いますが、それが“恐れ、ひれ伏

す” ような何かであった訳ではありません。ですから、それが聞こえた時の彼ら“ 弟子たち” は、急いであたりを見まわすだけです。ただ、「・・・もはやだれも見えず、ただイエスだけが、自分たちと一緒にいた」と続きますから、“ ・・・これに聞け” の“ これ” が、想定しているのはイエス以外ではあり得ない事は了解できます。しかし、“ 恐れ、地に伏す” ような何者かであるから、聞くということではないらしいのです。そうすると、聞くべきことを、言うべき人が語っているとするとするマタイによる福音書とは、異なるというか、その解りやすさに対して、少なからず解りにくいということになります。“ これに聞け” であったとしても、“ 恐れ、地に伏す” ようにして、有無を言わず聞くのではなく、少なからず聞く側にゆだねられているように読めます。

例えば、押し出すような使信のようなものがあって、それを聞く者は文句なしに従わざるを得ない、ということでもないのです。使信があるとしても、その意味も違ってきます。

マタイによる福音書の場合、雲の中からの声を聞いた弟子たちが、そのことで恐れ地に伏した時、近づいてきたイエスが、手を彼らにおいて「起きなさい、恐れることはない」と声をかけます。恐れ、地に伏す弟子たちと、何一つ恐れず、地に伏す弟子たちを和らげるイエスとが対照的に描

かれます。そのように描くことで、イエスの存在が際立つことになり、この人、イエスに“ 聞く” ことの理由が更に強調されます。マルコによる福音書の場合、「ただイエスだけが、自分たちと一緒にいられた」と、ただそのことだけが語られます。その“ 一緒におられた” という事実のことが、マルコによる福音書の場合「これはわたしの愛する子である。これに聞け」のことそのものになります。偉大な人の偉大な言葉に耳を傾けるのでもないし、権威に従うのでもないということになります。

だったら、何を見、何を聞くのか。マルコによる福音書が伝えるのは、言わば何者でもないけれども「もはやだれも見えず、イエスだけが、自分たちと一緒にいられた」という、示されたその事実に何にも代え難い意味を見出しているように思えます。

(菅澤 邦明)

## ～今月のいのり～

15年前の1月17日のことを覚えて、私たちはずっと祈りを重ねてきました。

時には絶望と憤りをあなたにぶつける祈りでした。

しかし神様、子どもたちの歌声が“震災と共に”生きている人々と街とに響き渡る日が与えられました。

震災を知らない子どもたちに、このことを伝える機会を与えられました。

あの寒い日に起こった出来事を、忘れずに、隠さずに、子どもたちに語った時に、私たちは彼らに生きるかたちを伝えることができるのだと思っています。

どうぞ神さま、愛する人たちとこの世では共に朝を迎えることが出来なくても、あなたの御許で再び共に永遠の朝を迎える日まで、私たちが精一杯生きぬくことができますように。

悲しみや苦しみも含めて、私たちは過去を背負って生き続けます。新しい困難にぶつかっても、私たちは生き抜きます。

どうか、私たちに愛する人々と自分自身を守る力、そして真心をもって伝える力を与えて下さい。

(大平 有紀)

## “ 3 学期がスタート 「がんばるぞー！！」”

少し長いお休みが終わって2010年1月8日、公同幼稚園の3学期がスタートしました。3学期のスタートはやっぱりコレがなくてはだめなのです。ドンドンドン！！と和太鼓の迫力のある力強い音が園庭に響き渡りました。園長先生・順子先生から始まり、教師も順番に力いっぱいたたきます。教師がたたき姿にうずうずしていたのは年長組の子どもたちです。「はやくオレもたたきたいなあ！！」そんな声も聞こえてきました。みんな気合を入れて、「がんばるぞー！！」ドンドンドン！！やはり子どもたちが力強くたたき姿には胸が熱くなります。そんな年長組の姿に憧れているのはぼっぼ組、さんぼ・らった組の子どもたちです。自分たちはまだ実際にはたたかないけれど、年長組がたたいているのを見て、その場でしっかり腕を振っている姿も見られました。太鼓をたたき子どもの姿、そして周りで応援している姿、どの姿もキラキラと輝いていた3学期の始まりのひとときでした。そんな時間を一緒に過ごした子どもたちと、30日(土)和太鼓のコンサートを楽しめるので今からとてもわくわくしています

ています。ふけよかせ つめたかないぞ～きみらとぼくたちはともだちなんだ～ そんな冬にぴったりの歌をうたいながら毎日元気いっぱい過ごしています。少し白っぽく、冬景色になっている畑には、先日霜柱が立ってきました。土もカチカチに固くなっていて、冬本番！な畑ですが、そんな厳しい寒さをやわげでくれるのが少しずつ咲き始めているスイセン、そしてみんなを暖めてくれる太陽！今、畑には彼岸花の葉がたくさん生えています。そんな彼岸花の葉に良く似ているスイセンの葉。近づいて良く見てみると、スイセンのつぼみがありました。豆のような形をしているつぼみ、これからたくさんのお花を咲かせてくれるのかと思うと、とても楽しみです。春にはチューリップ、夏にはひまわり、秋は彼岸花、そして冬にはスイセン、季節毎に色々な花を咲かせて私たちを楽しませてくれる畑に感謝します。

今年もこの時期がやってきました。激しく揺れたあの地震から15年が経ち、16年目に突入しました。当時小学校3年生だった私は、大地震を体験してただただ怖かったという記憶しかなかったのですが、公同と出会い、今を生きる子どもたちと過ごす毎日を

与えられて、そして月日が経つと同時に、毎日子どもたちと新しい朝を迎えられることが幸せなんだということに気付かされました。多くの幼い命をうばったあの大地震。子どもたちの命を追悼する大地震子ども追悼コンサートが16日に行われました。畑儀文さん、城村奈都子さん、中村朋子さん、そして佐渡裕さんをお迎えしてすてきな音楽のひとときを過ごさせていただきました。全身で歌う子どもたちの姿に“生きる”ということを考えさせられた時間となりました。15年前の辛くて悲しい過去

は消えることはないけれど、これから待っている未来が、この16日のような私たちに勇気を与えてくれる歌声、そして笑顔あふれる未来であることを強く願っています。

(延原 光)

## すずや便り

あけましておめでとうございます。小学生のころは「1999年7月に恐怖の大魔王が～」などの予言におびえていたものですが、無事に新世紀に入り10年！時のたつのは早いものです。それはさておき皆様はどのようなお正月を過ごされましたか？我が家はサンライズ瀬戸が取れなかったため、新幹線で香川へ向かいました。少し前から「源平絵巻物語(偕成社)」を読み始めていたので、前日に「屋島のたたかい」まで何とか読み終え、ぜひとも屋島から瀬戸内海を見下ろすぞ～と気合を入れていたのですが・・・かなりスケジュールの詰まった帰省だったため、足を伸ばすことができませんでした。あ～残念。

10冊シリーズのこの絵本は、赤羽末吉の絵なので読んでいてとても楽しいです・・・と書きたいところですが、言葉が難しく(武将の名前が読みにくい)必死に読んでいたのでなかなか絵を味わう余裕がありません。これからゆっくり楽しんでいきたいものです。赤羽さんの絵本といえば家には「日本の神話(あかね書房・6冊)」もあります。こちらも神話的な広がりがあるというか、うっとり眺めたくなる本です。特に第3巻「やまたのおろち」の最終ページは、はるか古代に気持ちを飛ばしていける場面でお気に入りです。機会があればぜひ、手にとってみてください。さて私は、2日に初売りに行ってみたものの開店 7

時間に到着するなんて甘すぎることに気づいたり（入店規制をされていて40分後にやっと入れました）、3日は成田山新勝寺で吉のおみくじをひいたり、と正統派？のお正月を過ごしました。子供たちの学校も始まり日常が戻ってきています。関東の冬は風も穏やかで日中は暖かく過ごせることが多いです。六甲の北風を思い出しながらこの原稿を書いています。今年もすべての人にとって良い年になりますように。

（富家 香麻里）

## みかん便り

あけましておめでとうございます。2010年になりましたね。31日からずっと風邪でダウンして、ついにはインフルエンザにかかってしまいました。なんちゅう出発や（笑）

2009年はあっさりとして、特に何もなかったように思いますが、思い返せば2008年より濃い経験をたくさんしていました。大学も2回生になり、1回生のころよりも周りが見え始めたと思います。春には愛媛にもすっかりと大事なツレができました。これが去年1番嬉しかったことかもしれません。国際関係の講義でグループを組んだみんなとも未だにずっと続いています。春は出会いの季節っ

て言いますが本当ですね。いろいろな人と出会いました。6月にはYOSAKOIソーラン祭りに参加するために4度目の札幌に向かいました。札幌へ向かうための2ヶ月の練習、今年も学ぶことが多かったです。感情を表現することの難しさや、いつまでも冷めたままの自分に対しての葛藤や、指導者としての行い方や、何を犠牲にしても進まないといけないことがあるということの発見など、結構ドラマティックな時間もすごせました。去年に引き続き、夕張にも訪れました。おじいちゃん、おばあちゃんたちとの再会や、会ってすぐにかけてくれた「おかえり」という言葉に、



もう涙流しっぱなしでしたね。懐かしい。

今村組に入り学んだことの1つにお年寄りの方たちとのふれあいがあります。今村先生がいつもこう教えてくれています。世間では人それぞれやとは思いますが、やはりお年寄りへの対応は冷たいものがあります。世話することができなくて邪魔者扱いをしたり、汚い、臭いなどの言葉をかけているのを見たことがあります。でも、戦後の世を必死に今の世の中に作り上げてきてくれたのは、身の回りにいるおじいちゃん・おばあちゃんです。なのに、その人たちを邪険に扱うことはどうなのか。世界中見ても日本はやはりその行いが目立つらしいです。今の親の世代や、僕らみたいな若い世代はまだ未熟で、お年寄りの人にいっぱい教わることがあります。やし、まだまだ歳を理由に引退せんと、ご指導していったほうがいいなあと思っています。

この4年、夕張を含め、茨城県大子市、熊本県上天草市、京都府宇治市、兵庫県尼崎市など、全国の老人ホームで踊りの公演やふれあい会をやってきました。踊りが終わって「ありがとう」と言ってくれるおばあちゃんに対して、自分は何もできずにただ泣いているだけです。いつも元気をもらって優しい笑顔で接してくれるおばあちゃんたちが大好きです。話をしてても伝わらないことも多いです

が、昔の話を聞くことは勉強になるし、決して無駄な時間にはなりませんでした。料理をしてるとどこからともなく現れ、簡単な煮物の作り方を教えてくれたこともありました。いってみたら、僕たち若者よりもよっぽどパワフルです。新成人になり、お年寄りが安心して引退できるような社会作りをせなあかんあつづくと思います。

2009年の振り返りですが、春が内容濃すぎて、夏秋はだらだら過ごしていました。なので、大して振り返ることもないです（笑）

個人的なことですが、2009年の最後、12月30日に長年いた場所を離れて新たなスタートを踏むこととなりました。今までの関係を繋ぐことなく切り捨ててスタートしていくようなことをして、いい出会いがあるのかはかなりの不安ですが、2010年、一から何か始めていこうと思います。何をするのかはまだ何も決まっていますが、何かしらみかん便りに書けるようなことを頑張っていきますのでよろしくお願い致します。

（河村 高志）

## 教会学校から

### 《12月の活動報告》

12月6日(日)

クリスマスグッズ作り No.2

12月13日(日)

クリスマスグッズを作る No.3

クリーン大作戦

12月20日(日)

クリスマス礼拝&祝会

12月27日(日)と1月3日(日)は冬休みです。

### 《1月の活動予定》

1月10日(日)

新年カルタ大会

毎年恒例の幼稚園・教会学校合同のカルタ大会では、特製の”特大いろはカルタ”で遊びます。大きい子どもも小さい子ども、それぞれの記憶力と瞬発力で本気で勝負します。

1月16日(土)

兵庫県南部大地震子ども追悼コンサート

西宮公同幼稚園、地域の子どもたちが集まって高松公園で追悼コンサートを行いました。15年前の震災を、知っている人も知らない人、みんなで集まって歌を歌います。震災の記憶と共に、そして子どもたちの歌声と共に、私たちは“震災後16年目”を迎えました。

1月17日(日)

幼稚園・教会学校の礼拝は「西宮公同教会兵庫県南部大地震犠牲者追悼記念礼拝」と合同です。

1月24日(日)

たいこのワークショップ

1月30日(土)

「おおだいこ いのち」コンサート

1月31日(日)

けん玉、こま、竹馬・・・冬の遊びを遊ぶ

2010年1月 あんなこと こんなこと...

## まいのなんでも案内

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

昨年は休載で終えるという情けない年末を迎えてしまったので、今年は頑張ります。心を入れ替えます。とりあえず下宿のPCを起動できる状態にします。年末年始は実家にいたので、先月号は見る事ができたのですが、まあやっぱり休載してしまうとね。自分でもちょっと寂しかったのですよ。

と、いうわけで新年です。大学生の時は午前中に起きるという習慣が皆無だったため、冬の朝がこんなに寒くて辛いということを忘れておりました。高校生の私はこの寒空の下を自転車で疾走していたわけですよ。なんて体力。4年間の学生生活というものはかくも人を怠惰にさせるものなのですね……。と、先日10年ぶりに会いました幼馴染(小学校の同級生)に語りましたら、とても冷たい目で見られました。はい、朝起きて三食食べて夜寝る真面目な大学生もいますよね。墮落は自分のせいですよ。

さてそんな今回、紹介というか語りという姿勢で、最近読んだ本について好き勝手言ってみたいと思います。いや、言わせてください。言いた

いの。やっと読んだんですよ、上橋菜穂子著『獣の奏者』。色々なところで紹介されていたし、アニメにもなっていましたので、ご存知の方も多いかと思います。数年前に1、2巻が出ておまして、それで終わりかと思いきや昨年3、4巻が発売されました。が、1、2巻が私が余り得意ではない「動物好き少女の成長小説」らしかったので、食指が動かなかったのです。すみません動物って何だか苦手なんです……。アレルギーでも何でもなし、可愛いとも思うのですが、飼いたいと思ったことはなくて。多分自分の世話で手一杯なんでしょうね。実家で母や兄に「にゃん」て呼ばれますからね。もはや私がペット扱い(それも手のかかる)。まあ話を戻すと、昨年末に「獣の奏者」3、4巻は「守り人シリーズ」的な壮大な展開(「守り人」については数年前こちらで紹介したと思います。ヒュウゴは今でも私の理想の御方です)になっていると耳にしまして、ならば読もう、と。

舞台は、神の子孫とされる「真王」が治めている国「リョザ神王国」。リョザ神王国には「闘蛇」という生き物がいて、それに乗って戦う「闘蛇軍」を率いる「大公」が国と民を守護

しています。国の中には「真王領」と「大公領」があり、両者の間は平和とは言いがたい状態。そんな大公領のアケ村に主人公エリンは生まれます。彼女の母親は、「霧の民」という緑色の目を持つ流浪の民の出身ですが、エリンの父親と結婚するため一族を抜けました。「霧の民」は闘蛇について詳しいので彼女は戦闘用闘蛇「牙」の世話をする役目をしていましたが、ある時、育てていた「牙」が一斉に大量死します。その責任を問われて死刑に処される彼女ですが、娘見捨てることができず、一族の掟に背き、禁じられた技を使って闘蛇に乗せてエリンを逃がします。そうして孤児となったエリンは蜂飼いのジョウンに拾われ、いろいろな動物に興味を持ちます。中でも「王獣」は非常に珍しい動物。エリンの出会った王獣は野生でしたが、それは滅多に見られないもので、真王の神性を象徴する存在として、王宮で数頭飼われているけれど人間には心を許さない、というのが多くの民の知る姿です。エリンの頭の良さや才能を見抜いたジョウンは彼女をカザルム王獣保護場の学舎へと入れます。そこでエリンは王獣の世話係となり、リランという王獣と心を通わせていきます。

というところから始まる「獣の奏者」なのですが・・・これじゃ、あらすじの「あ」にも辿り着いてないですね。仕方がないので久々の2回連載

としまして、感想は来月に回します。ネタばれしまくりの感想になるかと思しますので、嫌な方は来月号までに本編を読んでおいてくださいね。それでは、また来月。

(高橋 舞)



# 大切な贈り物・津門川 8 8

2009年11月21日に点灯式が行われてから、津門川には日が暮れるとイルミネーションが灯り、川沿いを歩く人の心を和ませています。

## つとがわ 編集後記

1月21日(木)～27日(水)に開催された「チカッ  
美恵子作品展/カムイの言霊 物語が織り成すアイヌ文  
様刺繍」の為に、会場の北海道立文学館を訪ねること  
になりました。「チカッ美恵子アイヌ文様カレンダー」  
や、著書の「アイヌ・モシリの風」で紹介されていた、  
アイヌ文様刺繍を目の当たりにして、それが「カムイの  
言霊」であることを実感することができたと思っています。  
“文様”となって実現した刺繍の曲線、曲線の先端が  
つらぬくように刺繍された様子は、今日に至るアイヌの  
人たちの存在の全てが込められていて、それを受け止め、  
それを表現することに、作者の存在の全てがかけられた  
働きに見えました。そうして会場で出会ったのは確かに  
「カムイの言霊」でした。かつて「カムイの言霊」は、広  
い北の大地にのびやかにあったであろうこと、今、その  
「カムイの言霊」は“物語が織り成すアイヌ文様刺繍”と  
なって、見る者を厳しく問わないでおかないものとして、  
そこにありました。

( K )

五年前の冬にある言葉に出会いました。「雪は天から送  
られた手紙である」雪の結晶の研究をされた中谷宇吉郎  
(1900-1962)さんの言葉です。なんて素敵なお言葉なんだろ  
う、それ以来、雪を見ると空を見上げるのがもっと楽し  
くなりました。そう思って見上げ、受け取る雪はそれま  
でと別の物のようです。今年も年長ぐみと出かけた雪山  
遊び、雪にゴロンと横になり、くるくる舞い落ちたり、  
真っ直ぐに落ちる雪を見上げました。自分が大きな自然  
の一部になった気もして、体に着いた雪の結晶を見つめ  
ました。

様々な形の雪の結晶の美しさを今年も子ども達と出会  
えた事に感謝します。自然の贈り物に感激した今年の冬、  
雪の結晶の本を今読んでいます。

( I )

小さなことにもすぐ感動する私ですが、最近1番感動  
したことは、雪の結晶を見たこと。まだ誰も足を踏み入  
れていない、フワフワの雪を掬って、目を凝らしてよく  
見てみると...。ひとつひとつ、ちゃんと結晶が見えるの  
です。

結晶なんて、肉眼で見られると思っていなかった！！

夢中になって結晶を眺めました。大人になってもまだ  
まだ知らないことだらけ。新しい発見、新しい出会いが  
とても嬉しいです。

( Y )

寅年で年女！1月に誕生日を向かえました。家族から  
友人からそして子ども達から保護者の方から～たくさん  
の方からの『おめでとう』はとっても嬉しく、幸せ者だ  
なあと感じています。やっぱりいくつになっても『おめ  
でとう』は嬉しいです。でも年を重ねるごとに1年が  
あっという間に過ぎていく感じがしてちょっと焦ってい  
たり...

15年前の誕生日の翌日、忘れもしないあの17日。誕  
生日の次の日に！と当時はショックだったのですが...大  
切な命が与えられてこうして毎日生きていることが幸せ  
です。あの日以来、そんな風に感じさせてくれる時期と  
なっています。

( N )

15年前、高校1年生だった次男、生まれてから震災ま  
で過ごした時間とほぼ同じくらいの時間を今日まで過ご  
したことになる。どういう光景が彼の中に残されていく  
のだろうか。3人の子どもたちの存在、その折々のこと  
ばには励まされた。新幹線が早く復旧したらいいなと  
思ったのは彼が「早く走る新幹線は子どもの夢と希望だ」  
というようなことを言ったから。「なんだ、元気じゃん。  
もっとしょげているかと思った」「いつまでも地震、地震  
て言わんとって」「関西の人はたくましいわ、しっかり立  
ち上がっているものね」それから時間の中で変化して  
いった、人からかけられることば。しんどい状況にいる  
人にかけることばの難しさ、大切さを知り、その一言の  
重要性にも思い至らされた。どんな場合も「がんばっ  
て！」は極力、口にしないけれど、そのことばを自然に  
お互いに使えることもあるのも知った。しかし、15年っ  
て果たして長いのか短いのか、これもその人の状況次第  
で変わってくるだろう。わたしはと言えば、暦が一旦  
還って、そしてまたまもなく満1歳。時々落ち込んだり、  
途轍もなく元気になったり、その繰り返しの中で今日も  
朝を迎えました。

( J )